

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520379

研究課題名(和文)

コーパスの利用および構築に基づく色彩語彙の文法形式に関する日仏語対照研究

研究課題名(英文)

Grammatical Structures of French and Japanese Color Terms: Contrastive Study based on Corpora

研究代表者：藤村 逸子 (FUJIMURA ITSUKO)

名古屋大学・国際開発研究科・教授

研究者番号：50229035

研究成果の概要(和文)：日本語では色彩語による名詞修飾の文法形式が多様であるのに対し、フランス語は実質的に形容詞しかなく、単調である。日本語の文法形式は色彩語の意味や機能に対応しているが、フランス語の色彩語が日本語のような意味を表せないわけではない。意味の生成には、形態統語形式以外に、単純頻度や2語間の生起確率などの頻度情報が役割を果たしていると考えられる。

研究成果の概要(英文)：Japanese colour terms are known to take on a variety of grammatical forms through nominal modification while those in French are limited to their adjectival forms. In Japanese these various grammatical forms, corresponding to meaning and function, enrich colour related descriptions. While French may not share the same level of modification as Japanese, it is not to say that it is any less capable of bringing vibrancy to the realm of chromatic expression. In the generation of meaning, in addition to morphosyntactic forms, probabilistic factors such as the probability of co-occurrences play an important role.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：言語学・日仏語対照研究・意味論・形態統語論・コーパス言語学

科研費の分科・細目：言語学・仏語学

キーワード：色彩語彙、コーパス、品詞、対照研究

1. 研究開始当初の背景

色彩語彙の研究は、従来、自然界に色のスペクトルとして存在する連続体を、言語を用いて分節し、カテゴリー化する方法に力点が置かれ、記号論・カテゴリー論、語彙意味論やメタファーの問題として議論されてきた。実際の発話で用いられる統語形式や派生形式は、カテゴリーや意味とは無関係のものとして軽んじられてきた。その理由の一つは、ヨーロッパの各言語において、色彩表現は形容詞

で表される他にはほとんど方法がないからである。Dixon (2004)は、色彩を、サイズや美醜、善悪などとともに、もっとも形容詞で表すのに適した典型的な指示対象であると言っている。

日本語においても、おそらくヨーロッパ語の色彩語の構造の影響で、日本語に色彩語の豊富な形式が存在することに気づかれないうまでであった。すなわち、色彩語の文法形式に関する研究は手をつけられないままの状況

であった。

2. 研究の目的

本研究は、日本語とフランス語の色彩表現を対象として、語とその文法に関する記述と説明を行うことにした。近年、コーパス言語学があきらかにした主張の一つは、「語にはそれぞれの文法的なパターン」があるということである。本研究ではこの流れにそって、日本語とフランス語の色彩語彙に関して、文法形式が実際の発話の中でどのようにして選ばれるのかを大規模コーパスを利用してさまざまな角度から多角的に記述することを目的とした。また、色彩は日本においてもフランスにおいても同じ指示対象であるにも関わらず、表現の形式が異なることから、そのような差異がどこから生まれているのかを明らかにすることも目的の一つにした。簡単に言うとなぜ、日本語の色彩語の多くは名詞であるのに、フランス語の色彩語は形容詞なのかという問題である。

3. 研究の方法

コーパスは以下のものを使った：

1. 書き言葉コーパス

(ア) フランス語

■ 新聞テキスト：Le Monde 紙 6 年分 (1988-2006) 14480 万語

■ 文学テキスト：Corpatext (4470 万語)

(イ) 日本語

■ 新聞テキスト：毎日新聞 (1999, 2007, 2008)

■ 新潮文庫の 100 冊

■ Google 日本語 n-gram データ

(ウ) パラレルコーパス

■ Le Monde Diplomatique

2. 会話コーパス

(ア) フランス語

■ Blanche-Benveniste

■ Corpus Allier

■ Delic

■ Elicop

(イ) 日本語

■ 名大会話コーパス

3. 歴史的コーパス

(ア) フランス語

■ Frantext

(イ) 日本語

■ 太陽コーパス

■ 「雛形本」(友禅染スタイルブック)

コーパスの構築に関しては、調査を始めたが、色彩語彙が話し言葉には現れにくいこと、日仏語を対照させるためには、様々な綿密な工夫が必要であることのために完成にはいた

っていない。

コーパスの分析の方法としては以下の 2 つの方法を使った。

1. Excel を使ったデータベース

大規模コーパスを意味の側面を考慮に入れつつに利用する際、可能な限り研究者が自分の目で例を確認する必要があり、またそのことによって、思いがけない面白い発見をすることができる。

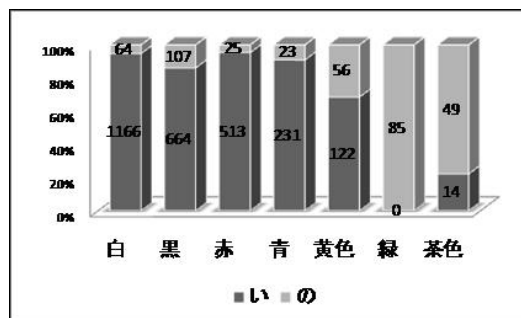
2. N-gram、MI スコアなどの統計手法

複合語化などの語彙化の問題や、語形態の定着などの文法化の問題は、確率論的に進むと考えられるので、統計学的方法論を使う。

4. 研究成果

(1) 語彙項目の不規則性

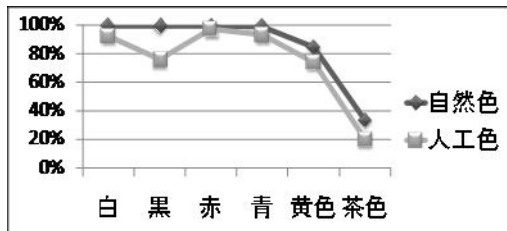
従来の語彙記述においては、内省に基づきパラダイムに基礎をおく意味記述が行われ、語彙項目の文法パターンやコロケーションパターンはあまり注目されてこなかった。色彩語彙の分野はその典型であった。その理由の一つは、意味は内省による記述が可能とされていたのに対し、文法パターンやコロケーションパターンは無意識の領域に属し、無限に存在するさまざまな語彙項目の一つ一つの文法パターンやコロケーションパターンを発見し、そこから何らかの一般化を行うことは方法論上の困難があったからである。しかし、コンピュータの技術革新に伴い、語彙項目の一つ一つに対して、詳細な文法パターンやコロケーションパターンを観察することは可能であることを明らかにした。



(2) 色彩という指示対象の性質とそのコード化

色彩はモノの側面と属性の側面がある。日本語では基本的に色彩はモノとしてコード化されている。フランス語は属性としてコード化されている。日本語には 6 つの属性としても用いられる色彩名があり、それだけの数で属性としての色彩の表現としては十分ということになる。日本語の色彩名詞は、日常の言葉遣いの中で用いられず、職業的な専門用

語として使われる傾向がある。日本語で典型的なのは、染物に使われる色彩表現であり、服飾品の描写のための表現として色彩名詞が受け継がれている。友禅染のスタイルブックの記述の「黒の地に紅の絞り」というような表現は現代のファッション雑誌にも数多く見られる。フランスのファッション雑誌には色彩の描写は見られない。



(3) 文法形式の意味

同じ指示対象を表現するときに、名詞と形容詞の選択があるならば、名詞にはデジタル的な意味、形容詞にはアナログ的な意味があることを明らかにした。人工色はデジタル的であり、自然色はアナログ的である。名詞の外延が広く内包が小さいと、色彩は属性としてのとらえ方しかできず、アナログ化されて形容詞で表現される。名詞の外延が狭く内包が大きくデジタル的であれば、色彩は名詞と形容詞のどちらも使用が可能になる。文法形式は、定義上意味をもつものではないが、使用の中ではその統語形態が意味を持つことがある。それは日本語とフランス語に限らず、言語に普遍的な特徴であると考えられる。

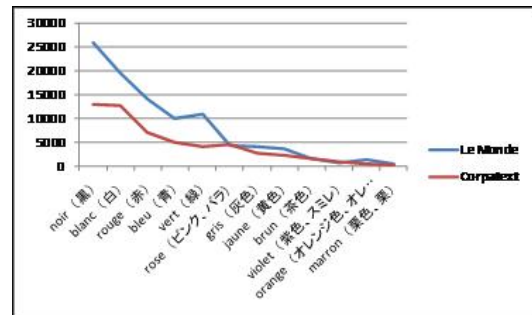
(4) N-gram と MI スコア

複合語を研究する方法として、N-gram と MI スコアを使用した。この方法は巨大コーパスを処理することによって始めて利用できる。名古屋大学国際開発研究科に整備されているコーパスサーバに実装されている共用のツールを使って Le Monde、Corpatext、毎日新聞の N-gram を作成した。その後、N-gram の中から色彩表現を含むものを取り出して、MI スコアを作成した。MI スコアは単純な統計量であるが、以前に行った研究と同様に大変興味深い結果を生成することを確認した。2語が一語化する語彙化のプロセスには MI スコアの計算方法と似たプロセスが働いているのではないかと考えられる。

(5) コーパスジャンルによる結果の差異

現状では、大規模でかつ操作がたやすいコーパスは、日本語もフランス語も新聞コーパスである。フランス語において文学テキストと新聞テキストを比較すると、新聞テキストは

特殊でありことがわかる。大規模ではあるが、新聞という一つの限られたジャンルのテキストである。Corpatext は 2700 件の文学テキストを集めたものである。Corpatext の傾向は、日本で教えられている丁寧な書き言葉のフランス語にはほぼ一致する。



(6) フランス語の色彩複合語の特徴

フランス語の色彩語を含む複合語は、形式的には、普通の名詞+形容詞と変わるところがないが、フランス語母語話者は、普通の連続と複合語を区別する。ジャーナリスティックなテキストにおける複合語の形成過程には以下の特徴がある。

- ① 色彩形容詞は色彩語のパラダイムを構成し、名詞と弁別的、かつ交差的に結合する。すでに存在する表現をもとに新しい表現を作ること容易であるが、色彩語が名詞を下位範疇化するとは限らない。Or noir「石油」と Or blanc(‘Gold’ ‘White’)「白金」は、Or(‘Gold’)「金」の下位範疇ではないし、Lunettes noires(‘Glasses’ ‘Black’)「サングラス」と Lunettes roses(‘Glasses’ ‘Pink’)「楽観的な見方」も同様。
- ② 正式名称が存在する対象に対し、ニックネームとして使われることが多い(Or noir, Billet vert など)。短い簡単な名詞と色彩形容詞の組み合わせからなる。同一名詞の繰り返しを避け、表現を豊かにするテキスト形成上の要請に基づく。同一の対象について多述するテキストで多用される。

	Le Monde		MIスコア
1	éminence grise	黒幕 (grey eminence)	16.46
2	flamants roses	フラミンゴ(ピンクのフラマン)	16.19
3	casques bleus	国連平和維持軍(青いヘルメット)	15.24
4	blouses blanches	白衣(病院関係者)	14.88
5	globules rouges	赤血球	14.60
6	khmers rouges	クメールルージュ	14.56
7	haricots verts	インゲン豆(緑豆)	14.20
8	boulets rouges	灼熱弾(赤い玉)	14.18
9	cartons jaunes	イエローカード	13.95
10	gueules noires	黒い顔(炭鉱夫)	13.95

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 藤村逸子「他動性再考:「被動作主」を表示する「が」と「を」の交替」*Asia and African Studies* 13-1, 査読有、2009, pp.73-112

② 藤村逸子「N-gram の手法によるフランス語の基本的「定型表現」の抽出—Le Monde と Corpatext を資料として—」, 『コーパスに基づく言語学教育研究報告 3, フィールド調査、言語コーパス、言語情報学』, 査読有, 2009, pp.111-138.

③ 藤村逸子「フランスの特徴的なコーパス研究: 語彙研究と政治ディスコース研究」『英語コーパス研究』15、査読有、2008、pp. 45-56.

[学会発表] (計3件)

① 藤村逸子「フランス語の新聞テキストに見られる色彩形容詞を含む複合名詞: Or noir, Billet vert, Nuit blanche などについて」フレイジオロジー研究会第3回例会 (国際大会)、2011.3.5-6. 関西学院大学梅田キャンパス

② 藤村逸子「名大会話コーパスに現れる言語現象、特に文末表現について」『ワークショップ: 名大会話コーパスを使った研究の可能性』2010.12.18. 名古屋大学

③ Fujimura, Itsuko "Interaction entre la syntaxe des lexèmes et le sémantisme des parties du discours: Nom vs. Adjectif de couleur en japonais" 3rd International LABLITA Workshop in Corpus Linguistics, 2008.6.4-5. フィレンツェ大学

[図書] (計1件)

① Fujimura Itsuko et al. *Bootstrapping Information from Corpora in a Cross-Linguistic Perspective*, MONEGLIA, Massimo & Alessandro PANUNZI (eds.), 2010, Firenze: Firenze University Press. p.228.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤村逸子 (FUJIMURA ITSUKO)

名古屋大学・大学院国際開発研究科・教授

研究者番号: 50229035

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし